

ある幼稚園のできごと。

二人の子どもがけんかした。先生はその場の成りゆきを見ていたのであるが、エネルギーを発散させればその場はおさまるだろうと思ひ、二人ですもうをさせた。しかしそのうちの一人は明らかに不満で、先生にくつついてばかりいた。そのあと子どもは一人で絵を描いており、それで事態は収まったかのようにみえた。しかし、先生はそこで、この子どもの当面した問題を解決したのだろうかと思ひ疑問をもった。たしかに、それ以上もんちゃくは起こらず、その場は収まった。だが、その子どもがけんかしなければならなかった、その子どもの問題は解決していないことに気がついた。私どもは子どもの中にあつて、その場かぎりの解決を求めてはならないのである。子どもがそこでぶつかっている困難を理解し、子どもがそこで新しいやり方を学ぶことを助けなければならぬのである。それでこそ、幼稚園は学習の場となるのである。

四月。

小さく幼い子どもたちが、いろいろの不安や心配に、小さな胸をいためながら、親に手をひかれて、のろろと幼稚園にやってくる。「たのしい幼稚園」というよりも、

「不安な幼稚園」をどうやってきりぬげるか、子どもの悩みは深刻である。

自分の靴箱はすぐにみつかるだろうか。力の強い男の子が、自分の帽子かけのそばに立っていないだろうか。

おしっこにいきたくなったらどうしよう。先生はつれてってくれるかしら、便所はうまくみつかるかしら。

みんな、知らない間に部屋に入つて、ひとりだけとり残されてしまった。どっちにいったらいいのだろう。きのうのことを思い出すと足がふるえてしまう。うちにいれおやつがもらえる時間なのに、どうしてこんなところに来なければならぬのだろう。……こんなことを思うと、子どもの足はまっすぐに幼稚園にすすまない。

不安から子どもは乱暴をする、いたずらをする、口をきかない、坐つて動かない。

この不安に直面した子どもが、この自分に課せられた課題をどのように解決していくかということ、この子どもの人間の成長の上に大きな意味をもっている。幼稚園の環境は子どもに親切につくられているか。先生の態度は、受けいれのための準備は、どうであらうか。幼稚園はこの時期をたいせつに育くまなければならぬ。

幼児の教育 第六十六巻 第四号

四月号 © 定価八〇円

昭和四十二年三月二十五日印刷

昭和四十二年四月 一 日発行

東京都文京区大塚二ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

編集兼 津 守 真  
発行者

東京都文京区大塚二ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

発行所 日本幼稚園協会

東京都板橋区志村一ノ一

印刷所 凸版印刷株式会社

東京都千代田区神田小川町三ノ一

発売所 株式会社 フレーベル館  
振替口座東京一九六四〇番

◎本誌御購読についての御注文は発売所 フレーベル館にお願いたします